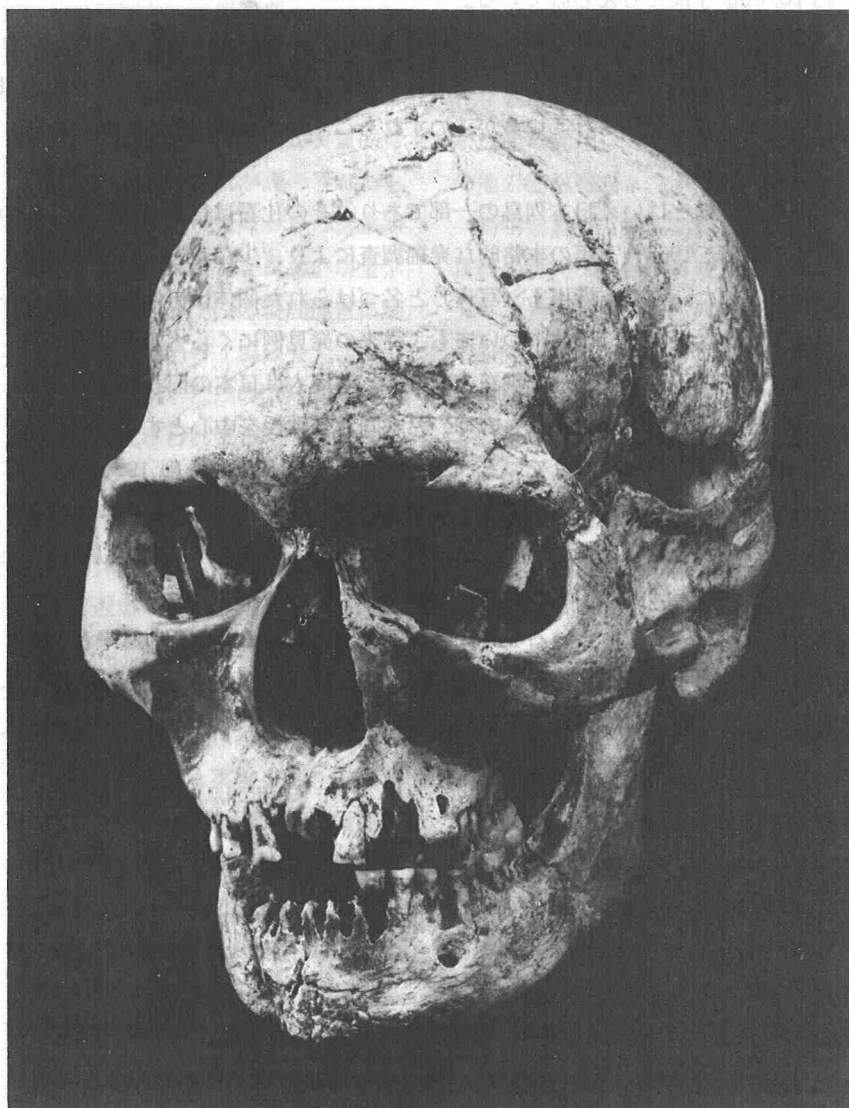


廣報

東京大学理学部



目次

表紙説明	1
遺伝子実験施設の発足	飯野徹雄 2
嗚呼 辻村太郎先生	佐藤 久 3
東大に来て思うこと	熊沢峰夫 4
理学部長と理学部職員組合との交渉	7
学部消息	8

表 紙 説 明

港川人の化石は1967年、沖縄県那覇市南東の港川で、大山盛保氏によってはじめて発見された。その年代は更新世（後期旧石器時代）末期で、¹⁴Cによる年代側定の結果、約18,000年前と考えられている。

日本列島には、おそらく10万年ほど前から人間が住んでいたと思われるが、酸性土壌が多いために、旧石器時代の人骨の発見はきわめて少ない。従来、約10カ所の遺跡からわずかな人骨が発見されているが、いずれもごく小さい断片で、くわしい研究は不可能であった。

港川遺跡は沖縄とはいえ日本列島の一部であり、その化石は日本の旧石器時代の貴重な標本である。1968—74年の本格的な発掘調査により、少なくとも9個体分の人骨化石が発見された。中でも港川Ⅰ（写真）と名づけられた個体は男性で、ほぼ全身の骨が揃っている。また他の個体についても、従来の発見例にくらべると格段に多くの骨が発掘されている。したがって現在のところ、港川人は日本の旧石器時代人としてはもっとも豊富な資料を提供するもので、鈴木尚名誉教授を中心とする研究グループにより、詳細な報告が出版されている（総合研究資料館 Bulletin No.19, 1982）。

港川人は縄文時代人の直接の祖先とみなせるので、現代日本人の祖先にも当ることになる。またその骨形態は、ほぼ同時代の華南の化石（柳江人）によく似ているため、日本人のルーツは中国南部に求められるという可能性が強い。

しかし日本列島には、いろいろな時代に、さまざまなルートからの渡来者があり、日本人の起源を解明することは、それほど簡単ではない。とはいえ、港川人が日本人の基盤となった人びとの代表者であることはほぼ確実で、この標本は今後の日本人研究に、大きな一石を投ずるものといえる。

人類学教室 埴原和郎

遺伝子実験施設の発足

飯野 徹 雄（遺伝子実験施設長）

本年4月に、東京大学遺伝子実験施設の設置が認められ、本学共同利用施設として発足しました。この施設は、当初理学部からの概算要求として計画が提出されたものですが、要求実現の過程での調整の結果、機構としては全学の共同利用施設とし、本年度設置分については、理学部が実質的な運営に当たるとの諒解のもとに設置が認められたものです。したがって、全学的な視点からの審議組織として、「遺伝子実験施設運営委員会」が全学レベルで設けられると共に、施設の管理運営に関する重要事項を審議するための「協議会」、および施設の有効な運用をはかるための「専門委員会」が、それぞれ理学部に設けられました（理学部広報15巻1号7～8頁参照）。そして施設の事務は当分の間理学部事務部で処理して載くことになっています。また人事については、施設長は全学の運営委員会の議を経て選出され、本年度定員が認められた専任教官は、理学部で選考が行われます。

ではこの施設はどのような目的で計画され、どんな業務を行うのかについて次に紹介しましょう。遺伝子の研究は、組換えDNA実験を中心とした新技術の開発により、ここ10年来著しい進展をみせ、これ迄の遺伝子像を大きく改めつつあります。

（具体的な内容に興味をお持ちの方は、拙著「新しい遺伝子像、中公自然選書、昭58」を御覧下さい。）さらに、新技術を用いた遺伝学の解析方法は、遺伝学自体の研究ばかりでなく、非常に広範囲な生物学の基礎・応用両面の研究にとって大きなインパクトを与えつつあります。そして、生物学の必須基礎技術の一つとして一般化されつつある状況となっています。

理学部でも既に組換えDNA実験技術等を利用して、植物プロトプラストへのウイルス核酸の導

入とその機能発現（生物化学教室）、ショウジョウバエの発生過程における神経系の解析（物理学教室）、微生物における遺伝子調節系の研究（植物学教室）、遺伝子編成に関する進化的研究（生化学教室）など、基礎生物学における重要な研究が広範に進行しており、さらに筋肉タンパク質その他の細胞構成タンパク質の構造と機能の研究（動物学教室、物理学教室）、細胞表面タンパク質群の研究（植物学教室）、人類集団におけるミトコンドリア遺伝子群の解析（人類学教室）などの研究が次々と着手されています。これらの研究と課題は着目点としてそれぞれユニークさを持っていますが、一方実験手段としては、「RIを用いた組換えDNA実験」が共通項として含まれています。そうした実験には各種の設備・機器が必要であると共に、実験の安全確保という立場から、安全管理体制が十分に整っていることが要請されます。それらの設備や管理体制の整備は、個々の研究室や教室でばらばらに行うよりも、共同利用施設を活かすことにより、極めて有効に実施できることは明白です。施設設置の大きな理由の一つはこのような趣旨での共同利用体制を作ることにあるわけです。

このような共同利用施設の意義は、単に設備の利用というハードな面ばかりでなく、共通の場で研究活動を行うことにより、情報交流と相互評価の機会が増し、それらを通じて研究面における協力の気運をもたらす中核的な触媒としての機能を果たすことが期待されるという点です。本実験施設では、こうして醸し出された共通テーマを基盤として、施設独自の研究テーマを設定し、専任教官を中心に強力に推進することを計画しています。

以上のような研究活動に加えて本施設では、組

換えDNA実験を用いる研究分野に新たに加わることを目指す本学の学生・研究者への教育を支援するための、講習会、演習コース等の実施を計画しています。また遺伝子実験にかかわる全国的な研究活動への協力事業として、組換えDNA実験指針とその運用に関する情報・資料を国際的に蒐集整理し、全国の研究者の利用の便に供すること、および遺伝子バンク、宿主ベクターバンクの分担保存機関としての役割を果たすことなどが計画に含まれています。

国家財政の厳しい折柄、本年度は、定員として助教授1名（純増）、助手1名（教務員振替え）、また設備費として要求のごく一部が認められ、いふならばほんの芽を出す程度で発足することになりました。しかしながら幸いにも芽を出させて載いたのですから、私達関係者はこの芽を大切に育て、将来立派に成長するように力を注いでゆきた

いと考えています。特に実験施設であるからには、実験の場としての建物および運営費が認められ、実質的な研究教育の場が整うことが是非必要です。

理学部の皆様の御理解により、御蔭様で来年度の概算要求に当り、本施設建物計画を化学館北側改築計画の一部として加えて載きました。この建物計画は、動物・植物・微生物のそれぞれの実験材料に応じた物理的封じ込め設備を具え、かつRI実験が可能ないように設計されています。また遺伝子バンク用の保存室、資料室、研究室などが附置されています。この計画が実現すれば、基礎研究分野における遺伝子実験施設として、わが国で最も充実したものになると自負しています。これらの計画が実現し、一時も早く共同利用施設としての実を挙げられる日の来ることを期しています。

嗚呼 辻村太郎先生

佐藤 久（名誉教授・地理）

名誉教授辻村太郎先生は、昭和58年7月15日未明、文京区弥生町の御自宅で逝去されました。御遺志により葬式その他一切の儀礼を廃し、ただ馳せ参じた後輩・教え子ら多数お見送りのなかを出棺、御遺骨は後日神奈川県小田原市の菩提所宝安寺に納められました。思えば先生が俄かに不快を訴え床に臥されたのは、昨年11月の中旬、例年出席歓談を楽しみにしておられた理学部恒例の名誉教授懇談会に先立つ数日のことでした。それから半歳余、見舞客をも断っての御静養で、6月12日の第93回目のお誕生日の頃には、付添いに新聞を読ませ食事に注文を出されるまでに御回復、との由でしたのに、一転、肺炎を併発されての急変であり

ました。

辻村先生は、第一高等学校を経て大正5年に東京帝国大学理科大学地質学科を卒業、引続き大学院で山崎直方教授のもとで地理学を専攻されました。大正7年から東京高等師範学校に講師・教授として自然地理学や地図学を講ずる一方、東大でも山崎教授をたすけて地理学教室の開設と地理学科創設の準備に当り、大正9年には、前年度に地質学科から地理学1講座を分離して新設された理学部地理学科の講師（同11年から助教授）を兼任、12年以降専任となられました。学科草創の頃は、主任の山崎教授が剛気な性格の持主であったこともあって、対外・対内の両面で裏方としての

辛酸を味わわれたようですが、昭和4年に山崎教授の急逝により助教授のまま学科と教室の実質的主宰者たる重責を担われてからは、昭和26年の停年退官まで、学生の教育と教室の運営に強い指導力を発揮されました。またこの間、文科系学部での地理学講義の開設にも尽力され、教養学部では昭和24年の人文科学部人文地理学教室の新設となって結実しました。

辻村先生時代の地理学教室には、なかば私塾の趣がありました。私が初めて先生の訾咳にふれたのは昭和16年のことですが、当時は正規のゼミナールのほかに土曜の午後にシュプレヒアーベントなる時間があり、助手以下の全員が実習室の大机を囲んで先生のお話を伺うのがしきたりになっていました。外国の新刊書や新着雑誌中の主要論文の紹介と批評、内外地理学界のトピックスなどがおもな話題で、正課外なので学部学生は適当にエスケープできましたが、抜打ちに各自の意見や研究の進捗状況の報告を求められる教官や大学院の学生には、気の抜けない超過勤務であったようでした。先生は型にはまった講義よりもこうした座談がことのほか好きでしたけれど、主語の省略の多い独特の話法は、こもりがちな低声とあいまって、席に連なる者の悩みの種でした。私などは、立派な鼻と大きな口、細いが驚きや感嘆を表わすために時折強く見開かれる目など、歌舞伎の立役にもまがうお顔立ちのなかで、動きの小さい唇をただ不思議に眺めていることが多かったのです。

講義や会議のない日には、先生は自宅で過されるのが普通でした。御自宅での先生は、和服をよれよれに着流し、読み差しの書籍や学会誌を幾重

にも並べたその中央に胡坐しておられました。先生は英・独・仏はもとより西・伊・蘭・瑞と西欧語のほとんどを読解され、早くから学界随一の読書家としても有名でしたが、読了後の書物は分野に応じて門弟達それぞれに分与されることが多く、いわゆる蔵書家ではありませんでした。先生において書物は、愛蔵の対象としてより伝達的手段としてより良く生きるものであったからでしょう。先生の書齋とそこでのご様子は、晩年まで殆ど変わりませんでした。とくに、相手の都合や思惑に頓着せず時間の経つのもお構いなしに、やや前ごごみに、最近読まれた論文の論評などに熱中される時の先生は、戦前のアーベントそのまま、不勉強な私は改めて新知見を与えられたことも一再ならず、身を縮めて拝聴するのみでした。

先生は万事に博覧強記の人でしたが、絵や洋楽には特に造詣が深く、鑑賞眼にも自信をお持ちでした。昨年10月末、上野のモネ展にお供した秋晴れの好日は、私にとって先生にお目にかかれた最後の日でしたが、しかしこの時も、やや足弱になってはいらしたものの、場内では目ぼしい作品の前でいちいち解説や思い出話をされるなど、同行の下村広島大学名誉教授と共に、先生の衰えを知らぬ記憶力に感嘆するばかりであったのです。俗に不足のない齢などと云いますが、年齢に関係なく新知識の吸収に努め研究からのリタイアを知らなかった辻村先生に関する限り、そのようなものはあり得ません。辻村太郎先生の御他界は、地理学ならびに地学にとって、まことに大きな損失でありました。

謹んで御冥福をお祈り申し上げます。

東大に来て思うこと

熊 沢 峰 夫 (地球物理)

地球・惑星内部物理学講座担当として、名古屋大学の地球科学教室から転任してきました。今までは地球内部の物性に関する実験的な仕事を主にやっていましたが、今年からは年齢の関数としての肉体的条件と東大の風土に合わせた別の方向に動き出そうと、地図の検討やエンジンの調整を始めしています。生活維持のための買物にも、東京では地図がないと私はまだ出歩けません。思いつくまゝに書いたら、東京の風土地図を眺めてうろろしている自分のことになりました。

<大学の伝統> 東京大学に紛争が始ったのは、ニューヨークの鳥獣保護地区にある静かなラモント研究所に居た時です。この研究所が所属するコロンビア大学本校でも紛争が日々過激になり、タカ派の学長が退陣し、実質的な大学改革が始りました。私の根城であった名古屋大学では何事も起っていない——という友人からの手紙に私は衝激を受けたものです。東京大学だけに改革が行なわれ、地方の大学が旧態然としたまゝ残されたとしたら大変だと思ったからです。早く帰国して改革のために働かねばならぬ、何をなすべきか、私には何ができるかなど、紛争の実態がわからぬまゝ思い悩み、米国での仕事の仕上げに追われてあせる日々を過しました。丁度その頃、ラモント研究所の海洋観測船ヴィーマ号が大平洋を横断して日本に行く計画がありました。これに便乗するのは海洋調査の経験をする絶好の機会であり、当時健在だったユーイング所長もそれを強く推めてくれましたが、私には母校の改革の方が重要に思えたので、最初楽しみにしていた西部の諸大学の訪問見学旅行もあきらめて直行便で帰りました。

帰り着いた名古屋大学は、私の希望通り紛争の最中でした。紛争の本質をちゃんと理解できぬま

ま、大学構成員大衆の一人として私は全共斗の学生諸君の暴力と対決する立場になりました。私の教室では「教室会議規約」ができ、相当徹底した「民主化」が行なわれました。この民主化は老先生を雑務から少し解放し、若手が相当な責任や権限と共に義務や雑務をしょい込む結果をもたらしました。これには功罪両面があって評価の分れるところでしょう。しかし私にとっては、自分の目の前の研究だけでなくその全体的位置付けや意義を以前より深く考え、また、研究や教育を支えるシステムは与えてもらうものではなく、自分達で確保・改善していくものであることを体験的に学んだ良い機会でした。若手が高額の科学研究費を獲得し、彼らの活躍が始ったのはこの時期で、東京大学でのこの傾向より少し早かったと思います。

東大にきて感ずることは、やはりいろいろな意味での歴史と伝統の重さです。ちょっとした古風さと、けっこう融通のきく現代的リベラリズムとが織物になっているように見えます。規則らしいものがなく、しかしかなり徹底した個人主義でことがはこばれていけるのは、やはり伝統に培れた風土なのでしょう。少し馴れてきたので大変住みやすいところだと思えます。

<父祖の地> 私事に亘りますが、私の父は本郷のどこかに下宿してこゝで学んだということです。山上御殿なところで飲んで、酔い覚めに三四郎池の水をおたまじゃくしごとのんだ話を聞いたことがあります。先日三四郎池を見に行き、昨秋他界した父の若き日を想ったことでした。祖父もタツオカチョウというところに書生として住み込んで苦学したと聞きました。竜岡門の近くではないかと探索してみましたが、見当がつかせませんでした。暇を見て調べてみたいと思っています。

理学部長と理学部職員組合との交渉

学部長と理職の定例交渉は、6月23日及び7月27日に理学部会議室でおこなわれた。主な内容は、以下のとおりである。

1. 教務職員の助手への振り替えについて

懸案になっている教務職員の昇給頭打ち解消問題について、理職から先に行われた事務局長と東大職組との交渉の結果をふまえ「助手のポストを流用せずに教務職員を助手に振り替えるための方法として、概算要求によりその実現が可能と考える。」との申し入れに対し学部長は、「この取り扱いについては教室の自主性との関係もあるので、教室から申し出があれば概算要求にとり込みたい。」と回答した。

2. 技術・図書職の5等級昇格について

今年度の技術・図書職の5等級昇格割当数が東大はゼロとなっている事態について、学部長は、「他大学とのバランスもあるときいている。しかし復活折衝をしたときいている。深刻な事態だと思うので、組合の要望は総長にも伝える」と述べた。

3. 教官の停年前の昇格について

理職から「今年度から停年1年前の教授が指定

職になる慣行が適用されない例が出ている」との申し入れに対して、学部長は「残念なことだと思うが、最近停年教授の数も増し定数との関係、他大学とのバランスなどから決められてきているので、手の打ちようがない。改善については要望しである」と回答した。

4. 期限付定員外職員の問題について

学部長は「該当者の立場も充分考慮し、努力している。」との報告があり、理職から一層の努力要請があった。

5. 人勤完全実施について

理職から「組合は完全実施に向けて努力しているので、学部長としてもできることをやって欲しい。」との要求に対し、学部長は「昨年は凍結になって残念である。今年度は何とか実施して欲しい。総長にもその旨上申するつもりである。」と回答した。

この他、理職書記局室、休養室、1号館エレベーター、5号館横ゴミ問題等について話し合いがおこなわれた。

< 学部消息 >

教授会メモ

7月20日(水)定例教授会

理学部4号館1320号室

- 議 題
- (1) 前回議事録承認
 - (2) 人事異動等報告
 - (3) 昭和58年度教職免許教科に関する認定科目表について
 - (4) 昭和58年度奨励研究員の受入れについて
 - (5) 人事委員会報告
 - (6) 会計委員会報告
 - (7) その他

(次回以降開催予定は、9月28日(水)、10月19日(水)、11月16日(水)、12月21日(水)
いずれも13時30分より、理学部4号館3階会議室(1320号室)です。)

海外渡航者

7 月

所属	官職	氏名	渡航先名	渡航期間	渡航目的
植物	助手	井上康則	ドイツ連邦共和国、スウェーデン フランス	7.9～8.1	第2回植物と微生物における青色光に関する国際会議ならびに1983光形態形成に関するヨーロッパ・シンポジウムに出席のため
地質	助教授	歌田 實	アメリカ合衆国	7.3～7.17	国際ゼオライト会議出席および堆積岩石学に関する研究連絡のため
動物	教授	江上信雄	オランダ	7.2～7.11	第7回国際放射線研究会議出席のため
地質	教授	飯島 東	アメリカ合衆国	7.7～7.20	第6回国際ゼオライト会議出席および堆積岩石学に関する調査・研究のため
地質	助教授	鎮西清高	ドイツ連邦共和国、フランス	7.9～8.1	機能形態学に関する研究打合せ第1回国際古生態学会議出席のため
化学	助手	藤原祺多夫	アメリカ合衆国	7.1～9.15	レーザーケイ光法による発癌性試剤の高感度選択的検出法の開発のための共同研究のため
生化	教授	岡田吉美	オランダ	7.17～7.29	ウィルスの構造と形態形成に関するEMBOワークショップ出席および分子生物学の調査研究のため
数学	助手	榎田幹也	カナダ、ポーランド	7.30～9.10	代数的位相幾何学研究会集及び国際数学会議に出席のため

所属	官職	氏名	渡航先名	渡航期間	渡航目的
情報	助手	山口和紀	アメリカ合衆国	7.3～7.24	Tex 使用者のグループ会議および工業数学と応用数学協会 (S I A M) 会議出席並びに技術討論のため
地理	教授	阪口豊	中華人民共和国	7.1～7.15	中国地理学の現状調査のため
物理	教授	鈴木増雄	連合王国	7.20～8.4	「第15回熱力学統計力学国際会議」に出席および統計力学に関する共同研究のため
数学	教授	藤田宏	アメリカ合衆国	7.10～7.16	夏季研究会「非線型函数解析と応用」出席のため
数学	教授	小松彦三郎	アメリカ合衆国	7.10～7.31	夏季研究会「非線型函数解析と応用」出席のため
化学	助手	梅澤喜夫	アメリカ合衆国	7.14～9.13	イオン選択性電極に関する基礎的研究のため
植物	助手	山登一郎	アメリカ合衆国	7.2～7.25	ゴードン・コンファレンス出席及び研究打合せのため
化学	教授	佐佐木行美	フランス	7.9～7.16	仏米共同ポリアニオンワークショップ出席のため
情報	教授	山田尚勇	中華人民共和国	7.9～7.17	漢字処理の標準化に関する調査のため
化学	助教授	原口紘晃	タイ	7.24～8.12	国際共同研究「有機廃棄物の農業利用に関する研究」
中間子	助教授	永嶺謙忠	アメリカ合衆国 カナダ	7.12～8.1	ミュオンワークショップ及びLAMP F2会議に出席のため
物理	助教授	折戸周治	ドイツ連邦共和国	7.24～8.12	e^+e^- 相互衝突装置「PETRA」及び e^+e^- 測定装置「JADE」による万能型測定装置及び測定のためのソフトウェアの調査研究のため
物理	助教授	釜江常好	アメリカ合衆国	7.1～7.25	電子・陽電子衝突型加速器による新粒子検出実験のため
動物	助教授	代谷次夫	アメリカ合衆国	7.11～9.5	DNA修復機構及び生物学に関する研究のため
化学	助手	林秀則	ベルギー	7.29～8.10	第6回国際光合成会議に出席のため
物理	教授	藤井忠男	アメリカ合衆国	7.25～8.13	電子・陽電子衝突型加速器による新粒子検出実験の研究連絡及びレプトン光子国際会議出席のため
化学	教授	大木道則	シンガポール	7.18～7.22	東南アジア諸国学術交流事業に関する調査のため
数学	教授	藤田宏	シンガポール	7.18～7.22	数学の研究及び数学研究の推進のため
生化	助教授	井上康男	スウェーデン	7.15～7.29	第7回国際複合糖質シンポジウム出席及び研究連絡のため
臨海	教授	木下清一郎	タイ	7.17～7.23	海洋科学分野における科学協力打合せのため
化学	助手	永田敬	チェコスロバキア ドイツ連邦共和国 スイス ドイツ民主共和国	7.19～8.19	第13回原子衝突国際会議出席及び物理化学に関する研究連絡のため

所属	官職	氏名	渡航先名	渡航期間	渡航目的
化学	助教授	近藤 保	チェコスロバキア ドイツ連邦共和国 スイス ドイツ民主共和国	7.19～8.19	第13回原子衝突国際会議出席及び物理化学に関する研究連絡のため
中間子	技官 教務職員	久野 良孝	スイス	7.25～10.11	偏極ミュオンと原子核との相互作用の研究実施のため
物理	助教授	矢崎 紘一	中華人民共和国	7.23～8.9	「核子・核子相互作用と核多体問題」に関する国際夏の学校出席のため
情報	教授	国井 利泰	アメリカ合衆国	7.23～8.6	SIGGRAPH'83 に出席及び CAD/CAM/CAE とコンピュータグラフィクスに関する調査・研究のため
情報	教授	米田 信夫	アメリカ合衆国 連合王国 ドイツ連邦共和国 フランス	7.24～8.12	第8回人工知能国際合同コンファレンス出席及びソフトウェア工学に関する海外技術動向調査のため
中間子	助手	今里 純	スイス	7.25～10.2	ミュオン・ビームによる μ SR 実験及び超電導機器の原子核・高エネルギー物理学に関する研究打合せのため

8 月

人類	助手	長谷川 眞現子	カナダ アメリカ合衆国	8.12～8.29	第11回国際人類学会出席および研究連絡のため
数学	助手	坪井 俊	ポーランド	8.14～9.4	「国際数学者会議」及び「葉層構造論及び関連する話題」研究集会出席のため
地理	講師	大森 博雄	オーストラリア	8.9～11.5	オーストラリア半乾燥地域における人間活動に伴う環境変化調査のため
物理	教授	小柴 昌俊	ドイツ連邦共和国	8.1～8.15	e^+e^- 相互衝突装置「PETRA」及び e^+e^- 測定装置「JADE」による万能型測定装置及び測定のためのソフトウェアの調査研究のため
地物研	助教授	国分 征	アイスランド	8.10～9.10	オーロラ現象の多点観測のため
人類	教授	埴原 和郎	カナダ	8.13～8.26	第11回国際人類学民族学会会議出席のため
地物	教授	永田 豊	ドイツ連邦共和国	8.12～8.30	第18回国際測地学・地域物理学連合 (IUGG) 総会に出席のため
地物研	教授	小口 高	カナダ ドイツ連邦共和国 ノルウェー	8.10～8.31	国際会議 IUGG 出席及び研究連絡のため
素粒子	助教授	山田 作衛	アメリカ合衆国	8.2～8.11	1993年高エネルギーにおける軽粒子光子相互作用に関する国際シンポジウム出席のため
数学	助教授	飯高 茂	ポーランド ドイツ連邦共和国	8.14～8.31	国際数学者会議および複素多様体の各論会議出席ならびに研究打合せのため
地物研	教授	玉尾 孜	ドイツ連邦共和国	8.17～8.27	磁気流体波の理論とモデリング研究集会出席のため

所属	官職	氏名	渡航先名	渡航期間	渡航目的
情報	助教授	佐藤雅彦	ドイツ連邦共和国	8.4～8.16	人工知能国際会議出席および研究打合せのため
地物	教授	佐藤良輔	ドイツ連邦共和国	8.13～8.28	国際測地学及び地球物理学連合（IUGG）第18回総会出席のため
数学	助教授	大島利雄	ポーランド	8.14～8.27	国際数学者会議に出席のため
数学	教授	伊原康隆	ドイツ連邦共和国	8.12～8.23	「数論的代数幾何学」会議出席および整数論に関する研究打合せのため
化学	教授	下破敬一郎	アメリカ合衆国	8.5～8.28	1983年度ゴードン会議出席及び無機化学に関する研究打合せのため
中間子	教授	山崎敏光	スイス ドイツ連邦共和国	8.15～9.6	μ SRに関する研究及び原子核物理学国際会議出席のため
素粒子	助教授	山田作衛	ドイツ連邦共和国	58 59 8.19～3.1	国際協同実験電子・陽電子衝突実験のため
生化	助手	須藤和夫	アメリカ合衆国	8.8～8.20	生化学に関する研究連絡のため
地物研	教授	福島直	ドイツ連邦共和国 フィンランド ノルウェー	8.11～10.31	国際地球電磁気学・超高層大気物理学協会出席および研究連絡のため
人類	助手	河内真紀子	アメリカ合衆国	S58～S59 8.12～6.1	第11回国際人類学・民族学会議出席および形態人類学に関する研究のため
物理	教授	有馬朗人	オーストラリア	8.13～8.23	光陽子国際会議出席及び原子核理論の研究のため
地殻	助手	金沢敏彦	フランス	8.15～11.6	深海底高精度観測に関する調査研究のため
地殻	助手	中村裕二	カナダ アメリカ合衆国	8.16～10.3	国際深海掘削計画によるグローマー・チャレンジャー号第95次航海乗船及び研究打合せ
地殻	助手	平田直	ドイツ連邦共和国	8.16～9.3	第18回国際測地学・地球物理学連合（IUGG）総会に出席のため
化学	教授	田隅三生	連合王国 デンマーク フランス	8.16～8.27	国際共同研究「電導性高分子および生体高分子の中性子散乱による研究」実施のため及び第32回国際純正・応用化学連合総会
臨海	助手	雨宮昭南	ドイツ連邦共和国 連合王国、スウェーデン、ギリシア、ポルトガル、フランス、イタリア	S59 8.16～3.31	地中海産ウニ類の比較発生と精子の比較形態についての研究および第3回国際無脊椎動物生殖生物学シンポジウム出席のため
化学	教授	田丸謙二	デンマーク オランダ	8.17～9.9	国際純正・応用化学総会出席および触媒化学に関する研究打合せのため
化学	教授	朽津耕三	連合王国 デンマーク	8.13～8.25	第32回国際純正応用化学連合（IUPAC）総会に出席及び物理化学研究打合せのため
物理	助教授	矢崎紘一	スイス ドイツ連邦共和国	8.17～9.10	第10回少数多体系国際会議出席および「閉じ込め力による散乱問題」に関する共同研究

所属	官職	氏名	渡航先名	渡航期間	渡航目的
物理	助手	岩佐 泉	ドイツ連邦共和国	8.20～9.5	フォノン散乱国際会議出席及び固体物理学に関する研究連絡のため
人類	教授	尾本 恵市	カナダ	8.20～9.3	第11回人類学・民族学国際会議出席のため
中間	技官	裕崎 禎市郎	カナダ	8.24～9.26	本強度ミュオンによる μ SR実験のため
天文	助教授	尾崎 洋二	ドイツ連邦共和国	S58 S59 8.31～9.1	天体物理学に関する研究のため
化学	教授	大木 道則	フランス	8.20～9.1	第7回化学教育国際会議及びIUPAC化学教育委員会当席のため
物理	助教授	永官 正治	イタリア ドイツ連邦共和国 フランス	8.27～9.11	原子核物理国際会議出席及び原子核実験に関する研究打合せ
化学	教授	向山 光昭	デンマーク フランス スイス	8.25～9.15	デンマーク化学会議、第2回IUPAC有機合成会議、フランス化学会会議に出席および有機合成化学に関する研究打合せのため

毎月1日は

「省エネルギー」

の日です。

あなたです!

火事を出すのも

防ぐのも

編集:

矢崎 紘一 (物理)	内線	4 1 2 3
松野 太郎 (地物)		4 2 9 9
露木 孝彦 (化学)		4 3 5 7
田賀井 篤平 (鉱物)		4 5 4 4
尾本 恵市 (人類)		4 4 8 2
